第11章　まとめ

段上　達雄

まとめ

（1）自　然

地形・地質

別府地域は九州東部にあり、地質・地形構造的に大地溝帯西部から続く西南日本の構造の九州への入口に相当すると共に別府－島原地溝の東部に位置する。別府地域は東に別府湾を擁し、西側背後には鶴見岳(標高1,374.5m）から伽藍岳（標高1,045.3m）に連なる火山群がそびえている。これらの火山群の前面には火山麓扇状地の地形が広がり、その扇状地上に別府市街地が成立している。そして扇状地の南北の縁部は、北を鉄輪断層、南を朝見川断層という直線的な崖で限られている。別府地域の独特な地形と地質は火山の存在抜きには考えることはできない。

温泉と湯けむり

別府の温泉は、マグマから熱と物質を供給されて生じた「火山性温泉」である。現実の温泉水は、火山群の地下深部に貯留されている原熱水（深部熱水ともいう）と天水が混合したものであるが、近年の研究により、原熱水も古い天水であることが明らかとなった。このような地下に分布する天水起源の温泉水は常時入れ替わっており、その入れ替わりに要する平均的な時間は約50年と見積もられている。

2008年３月末現在、別府の総源泉数は2,516であるが、それらの形態は多種多様である。まず、湧出形態（採取方法）は、ほとんどが掘削による「掘削泉」であり、古来の「自然湧出泉」はごく少数である。利用されている掘削泉のうち、自力で噴出する「自噴泉」は約20％であり、大半が動力を用いて汲み上げる「動力泉」である。次に流出（採取）流体の種類としては、水蒸気だけを噴出する「噴気」（温度は沸点以上）、熱水と水蒸気の混合流体（温度は沸点）が噴出する「沸騰泉」、液体の温泉水が湧出する「温泉（一般温泉）」の３種がある。これらのうち「湯けむり」を立ち上がらせているのは噴気と沸騰泉であり、その数（304）は全国総数の26％にも及んでいる。

別府地域の泉質もまた多種多様であり、温泉水１kg中に含まれる成分総量（ガスを除く）が１ｇ未満の単純泉、および溶存する主要な陰イオンによって分類される３つの基本的な塩類泉の全てが存在する。すなわち、塩化物イオンを主成分とする「塩化物泉」、硫酸イオンを主成分とする「硫酸塩泉」、炭酸水素イオンを主成分とする「炭酸水素塩泉」である。これらのうち、塩化物泉は原熱水が天水によって希釈されたものであり、「熱水希釈型温泉」または「熱水性温泉」と呼ばれる。沸騰泉のほとんど全ては、この泉質を示す。他方、硫酸塩泉と炭酸水素塩泉は、原熱水から分離した蒸気が地下水に混入して生じたものであり、一括して「蒸気加熱型温泉」または「蒸気性温泉」と呼ばれる。これらの分布には地域性があり、南部地域には炭酸水素塩泉型が多く、北部地域には硫酸塩泉型が多い。また、北部地域の最上流部に当たる伽藍岳・明礬地区には、強い硫酸塩性の自然湧出泉がある。

実際の温泉水は３種の塩類泉と地下水が混じり合って形成されるので、泉質は多種多様となり、別府にはほとんどの泉質の温泉が存在する。たとえば、亀川地区では塩化物泉と硫酸塩泉が混合した型の泉質が見られ、別府地区では塩化物泉と炭酸水素塩泉が混合した泉質が見られる。また、南東端の浜脇地区での温泉水は海水浸入の影響を受けている。

別府古来の自然湧出泉は、北縁部の明礬・鉄輪・柴石・亀川、南縁部の堀田・観海寺・別府・浜脇など、別府八湯それぞれの範囲とその近傍に限られ、鶴見火山群からの高温水の流路である北と南の断層に沿って分布していた。別府では19世紀末頃から温泉井の掘削が始まったが、太平洋戦争の終結直後の1950年頃までの源泉分布域

は、やはり別府八湯を中心とした地域であった。その後、温泉開発が本格化し、それまで源泉のなかった地域でも掘削が行われ、扇状地中央部を除く全域に源泉が分布するようになった。特に明礬・鉄輪・鶴見・堀田・観海寺など高地部での源泉数が増加し、その多くは噴気や沸騰泉である。これにより、優勢な湯けむりの数が増加した。

しかし、明治時代から継続してきた別府地域の温泉開発、特に1960年代の急激な温泉開発によって、別府の温泉系に変化が生じた。1960年代以前にはほとんどの温泉が自噴していたのに、それ以後は地下温泉水圧が低下して自噴泉が減少したのである。特に北部の鉄輪地区では沸騰泉や噴気から大量の熱水と蒸気が流出し、その水位は周辺域よりも50m も低下してしまっている。また、別府駅北西部に分布する温泉のように、塩化物泉型から炭酸水素塩泉型に変化するなど、泉質の変化が見られる地域も出てきた。

気象

別府地域の気候は基本的には瀬戸内型で、中国山地や四国山地、あるいは九州山地に囲まれ、夏冬の季節風の影響が弱められ降水量が少なく、海陸風が卓越するなどの特徴を持つ。しかし、西日本の中でも大分県は太平洋沿岸型と日本海沿岸型、および瀬戸内型など異なる気候型が相接する位置にあって複雑で、気候区の遷移域としての性格が強い。

大分県は瀬戸内型（Ⅰ）、瀬戸内型（Ⅱ）、太平洋沿岸型および内陸山地型という、４つの気候型に区分される。特に大分県の中部では各気候型が相接している点が特徴である。別府市の地域に注目すると、鶴見山塊を境として石垣原扇状地など東半分が瀬戸内型（Ⅰ）、西半分が内陸山地型となっている。瀬戸内型（Ⅰ）というのは、年間を通じて降水量は少ないが（1,800ミリ以下）、冬季には降水日数が多く、日本海沿岸型の傾向の強いタイプである。また、内陸山地型は年間2,000ミリ以上の降水があり、冬季には雨や雪を多く見るものである。

湯けむりがよく見える気象条件として、第一に湿度の高いことが挙げられる。湿度が高い時には、湯けむりの水滴が蒸発しにくいからである。梅雨時の６～７月には湿度の高いときによく見える一方、秋から冬にかけては、湿度がやや低くてもよく見える日がある。また、朝夕の湿度の高いときにもよく見える。しかし、快晴の日にはよく見えないことが多い。季節的には、春は見えにくいことが多く、色も灰色がかって美しくない。冬は湯けむりの色が真っ白で美しいが、風が強いと消されてしまう。冬によく見えるのは、気温が低いので水滴の凝結量が多いからであるが、その他に空気が澄んでいることとも関係があるように思われる。

植生

別府市は温暖な瀬戸内型気候に属するため、海岸部の低地から丘陵地にかけてはスダジイ林やタブノキ林など常緑広葉樹林が生育している。しかし、平坦部は都市として発展し、その多くは商業地域、居住空間としてすでに開発されている。一方、背後には由布・鶴見火山群が控えていて、山裾は阿蘇、九重から連続する火山性のススキ草原が広がる。山腹はコナラやイヌシデなどの落葉広葉樹林帯となり、山頂部は九州地方特有のミヤマキリシマ低木林に被われている。

鉄輪地区は標高約100～200m にあり、温泉・地獄地帯として発展し、ホテルや旅館、商店などが建ち並ぶ。北側台地斜面の樹林を除くと、平坦部の緑地は公園や庭園、耕作地などごくわずかな面積にとどまり、景観上重要な自然植生のスダジイ群落、タブノキ群落は地獄地帯の北側に位置する台地の斜面に分布している。ここのスダジイ群落は地獄地帯に接しており、樹林の濃厚な緑は白く立ち上る湯けむりの背景となっていて、緑と白のコントラストは秀一の景観である。生育地が急傾斜地であり斜面崩壊防止の効果も果たしており防災上も重要な群落である。鉄輪地獄地帯の稲荷大明神（熊野社）の小高い丘には７本のアカガシを主木とする木立がある。丘のそばまで宅地がせまり、面積は狭いが、かつてここにアカガシ林が広がっていたことを証明する貴重な木立であ

る。アカガシのほかにはアラカシ、クロガネモチ、タブノキ、シャシャンボ、ヒサカキクロキ、ヤブコウジなども生育し自然林であったことの痕跡を残している。

明礬地区は標高約300～400mの東南東方向に開けた馬蹄形の丘陵斜面の懐にあり、急傾斜地が多い。斜面のタブノキ群落と温泉地区の背後を取り囲む尾根のアカマツ・コナラ群落が自然植生の主体をなしている。また、小面積ではあるが、湯の花小屋周辺に群生しているケツクシテンツキ群落も特徴的で、明礬地区の特色ともいえる。この地区の背後を取り囲む、標高400m付近の尾根部は表土も浅く、岩肌が露出したところもあり、土地も乾燥している。ここではコナラ、イヌシデ、ヤマザクラ、リョウブ、ハゼノキ、ネジキなどの落葉樹が生育し、秋には紅葉してアカマツ、アセビなどの常緑樹とコントラストを見せる。林内にはヤマツツジの生育も見られ、九州中部地区に特有なアカマツ＝ヤマツツジ群落と思われるが、アカマツの枯死が進んで群落としての勢いは衰えつつある。

この両地区には、スダジイ（ブナ科）・タブノキ（クスノキ科）・コナラ（ブナ科）・ホルトノキ（ホルトノキ科）・ウスギモクセイ（モクセイ科）などの貴重な植物があり、借景として重要な植物群落としては、湯けむり展望台下のさくら並木と森、大平山（扇山）斜面の火山性草原がある。

（2）温泉と観光の歴史

古代・中世

別府温泉の歴史的記述は奈良時代に編纂された『豊後国風土記』に始まる。それには現在の血の池地獄と考えられる「赤湯の泉」などの記述が見られる。しかし、温泉利用という点では、赤湯の泥を家屋の柱に塗る程度で、温泉保養に触れた明白な記載はない。しかし、同時期の『伊予国風土記逸文』には、大穴持命が宿奈毘古那命の温泉療法を道後温泉で試み、速見の湯、すなわち別府温泉の湯を下樋を用いて取り寄せたことなどが記されている。古くから道後温泉では入浴が行われ、天皇までわざわざ行幸してきていたことがわかる。

別府温泉が湯治場、温泉療養後として知られるようになるのは中世以降である。鉄輪温泉の中心部には温泉山永福寺（旧松寿寺・松寿庵。一遍の幼名は松寿丸）があり、その南隣には明治初年まで寺の境内社であった温泉神社が鎮座していた。明治３年の神仏分離令によって鉄輪の西側の山手に移されたが、祭神は大巳貴命と少彦名命で、道後温泉を開いた神が祀られている。地元に残る伝承では、時宗の開祖一遍上人が荒廃していた地獄を鎮めて温泉療養の場として鉄輪温泉を開いたという。永福寺の下手には風呂本という地名の由来となった蒸し湯がある。永福寺のもととなる松寿寺の創建時期は明確ではないが、創建以来幾度となく廃絶し、その度に復興してきたと伝える。延享年間（1744～48）に時宗の遊行上人が回国の際に別府を訪れ、一遍ゆかりの松寿寺を中興したという。『遊行日鑑』には遊行上人50世快存が享保18年（1733）に別府に立ち寄り、３月９日の項に「此所（別府）より鶴見嶽権現へ一り（里）御参詣、参銭五百文、此所ニ一遍上人御開基温泉有リ、一遍上人御影堂へ参詣、御散銭五百文上ル」と記され、一遍上人御影堂があったことを記している。一遍上人御開基の温泉とは石風呂のことであろう。「松寿寺由来口上覚書」によれば、延享５年（1748）に南鉄輪村の組頭が時宗本山の藤沢清浄光寺に願い出て、山号寺号を許されて時宗末となり、宝暦８年（1758）には清浄光寺から住職が派遣され、12代まで続いたが、明治４年（1871）に無住となったという。そして明治24年（1891）に尾道の永福寺の寺号を借り受けて永福寺として再興されたのである。

一遍は道後温泉を根拠地としていた河野一族の出身であった。『一遍上人絵伝』によれば、一遍は建治２年（1276）春ころに豊後に滞在した。この時、豊後守護で鎮西奉行人であった大友頼泰は一遍に帰依した。そこで大友氏の許にいた他阿弥陀仏（後の時宗二世真教上人）と出会い、他阿弥陀仏は「同行相貌の契」を結んでいる。その後、『一遍上人年譜略』によれば、一遍は別府へ向かい、鶴見嶽のかたわらの温泉（鶴見温泉）の権現宮社

頭の楠木に小刀で名号を刻み、別時念仏を行ったという。『豊鐘善鳴録』では鶴見社祠を訪れて楠樹に名号を刻み、鉄輪温泉に至って松寿寺を建立したという。鉄輪温泉が一遍によって湯治場として開かれた伝承は事実であった可能性は高い。

近世

鉄輪温泉中心の地名が湯本ではなく風呂本であったように、風呂、すなわち別府の蒸し湯は古来から有名であった。江戸時代の紀行文などに鉄輪の蒸し湯のことが記されている。福岡藩の学者貝原益軒は元禄７年(1694)に鉄輪温泉を訪れ、『豊国紀行』に「温湯の上にかまえたる風呂有、病者是に入て乾浴す」と記している。また、速見郡小浦村出身の儒学者脇蘭室は『菡海漁談』には「中にも南鉄輪村には、欝蒸の気を蔵め包み、材を構へて草土を覆ひて窟の如くし、藁を布き枕として、疾痛あるもの偃臥して此の気に蒸すに、甚快く験を得こと多しとなり」と記し、南鉄輪の風呂本の蒸し湯が温泉治療の場であったことがわかる。

寛政11年（1799）の『御預所聞書』には、北鉄輪村は「出湯六ヶ所　湯治人あり　石風呂一ヶ所　諸病によし地獄五ヶ所　麻・いちび・米抔（など）　蒸物致候」とあり、南鉄輪村は「観音、薬師庵　時宗松寿庵　是ハ除地空地也、藤澤遊行之古跡湯　湯瀧山松寿寺と申伝候　石風呂　遊行一遍上人開基と申伝候　所々ヨリ湯治人あり、八月廿三日上人之御忌と申。薬師庵ニ而仏事供養あり」と記されている。

『鶴見七湯廼記』は豊後森藩主久留島通嘉（みちひろ）が、弘化２年（1845）に同藩の飛び地であった鶴見村に温泉場である照湯を整備した際に、伊島重枝に文を書かせ、江川吉貞に絵を描かせた画帖である。これには鶴見村の温泉、名所旧跡、風俗などを活写している。照湯の絵には滝湯や蒸し湯が描かれ、今井地獄では噴気で芋などを蒸している光景が描かれており、現在の「地獄蒸し」調理法が古くから伝わっていることをうかがわせる。また、明礬温泉での明礬製造も描かれており、『鶴見七湯廼記』は近世末の別府の温泉利用の状況がわかる貴重な史料である。

明治の別府温泉

別府観光の幕開けは、明治４年（1871）に県令松方正義によって別府（楠）港が整備され、明治６年（1873）の大阪航路開設から始まったといえる。この航路は大阪開商社によって開かれ、蒸気船益丸（18トン）が月一往復した。大阪から香川県の多度津・広島県の鞆の津・愛媛県三津浜を経由して別府に至る航路であった。２年後には満珠丸と金刀比羅丸が就航し、大阪別府間の瀬戸内航路は競争時代を迎えることとなった。これらの航路によって別府温泉郷は京阪神地方と直接結ばれることになり、外来客を本格的に迎え入れることになった。明治12年から14年の僅か２か年で別府温泉と浜脇温泉の入浴客は10倍前後に増加し、観光地化が急速に進んだ。その背景には竹瓦温泉などの共同浴場の新築をはじめとした施設開発があった。それに対して鉄輪は3.5倍の漸増で、蒸し湯の入浴客数は横ばい状態であった。

明治９年（1776）の『豊後国速見郡村誌』には、「蒸風呂　熱湯ノ上ニ石ヲ畳ミ室ヲ成ス、人痛処ヲ蒸セハ平癒ス、疝積、□□、膝行等ニ効験アリ」と記され、近代になっても引き続き、蒸し湯は温泉治療の役割を担っていたことがわかる。また、別府地域の11ヵ村のうち、温泉があるのは８ヵ村で計31か所、入浴場は７ヵ村で36か所、旅館142軒、年間浴客数19,200人と記されている。旅館の半数、入浴客の62.5％は別府・浜脇両村に集中し、阪神地区と航路で結ばれた当時の別府地域の玄関口として発達したものであった。

明治初年の鉄輪村には、蓼原湯・渋ノ湯・浮湯・蒸風呂・熱湯・赤湯地獄・地獄原の７か所の温泉があった。温泉場近くには旅籠34軒あり、年間約3,000人が湯治に訪れていた。

明治44年、国鉄大分線（現在のJR日豊本線）が別府まで南下して別府駅が開設され、海路のみならず陸路も整備され、別府地域の温泉は大正期になるとますます発展していった。

明治末期、日豊線工事の関係で来別していた千寿吉彦は、温泉付き高級別荘地を開発するつもりで海地獄を買い取った。ところが、海地獄の管理を任されていた宇都宮則綱が、明治43年に遊覧施設を整えて入場料を徴収するようになると、血の池地獄や坊主地獄も有料化して、観光施設としての「地獄」の開発が一気に伸展するようになる。

別府の「地獄」という名称は近世の紀行文にたびたび出てくるので、それ以前から使用されていたと考えられている。現在の鉄輪の地獄地帯はかつて「地獄原」と呼ばれ、噴出する熱湯が付近の水田に流入して被害を及ぼすなど厄介者扱いされていた。交通機関の発達と湯治客の増加は、地獄見物の遊覧客を増やしていった。大正11年鉄輪地獄、同12年龍巻地獄、同13年無間地獄、同14年鶴見地獄、昭和３年八幡地獄、同５年鬼石地獄、同６年白池地獄、同７年鬼山地獄・金龍地獄、同11年竈地獄、同12年雷園地獄など次々に観光施設として開発されていったのである。

大正から昭和前期

明治末から大正初頭にかけて、鉄輪までの交通手段は徒歩・人力車・馬車等が主力であり、人力車による地獄めぐりも行われるようになっていた。大正６年頃に地獄遊覧のタクシーが登場し、同９年にはバス（６人乗りの乗合自動車）の運行が始まる。増え続ける観光客の便利なように大正10年には地獄循環道路が開通し、地獄めぐりにかかる時間は短縮した。この時期、別府観光の発展に大きな足跡を残したのは「別府観光の父」と呼ばれている油屋熊八であった。大々的に別府温泉の広告を始め、昭和３年（1928）には全国初の試みとして七五調で別府温泉の案内をする「ガイド付き遊覧バス」の運行を開始したのである。別府が観光地として全国に知れ渡ると共に市内各所に観光施設が整備されていった。大正14年（1925）には別府鶴見園が開園し、収容人員600人の大劇場を建設して宝塚を模した歌劇団を結成した。昭和３年には遊園地ケーブル遊園（ケーブルラクテンチ）が開園している。この当時別府温泉郷は湯治を中心とする鉄輪温泉・明礬温泉、保養的な観海寺温泉そして歓楽色の強い浜脇・北浜温泉とに大まかに区分されていた。

昭和３年には中外産業博覧会が開催され、80万人の入場者を集め、昭和12年（1937）には別府国際温泉観光大博覧会が催されて好評を博した。温泉観光地として脚光を浴びた別府は、別荘地の開発も盛んに行われた。新別府、六角温泉、荘園、田の湯地区などは別荘地として開発されたのである。そして日本は戦争の嵐の中に巻き込まれてゆく。昭和15年には日中戦争の長期化で全国の遊覧バスが廃止されたが、別府の地獄めぐりだけは存続が許された。しかし、戦後しばらくはバスの老朽化や燃料不足で苦しい時期があったが、次第に観光客も増加し、地獄めぐりは息を吹き返すことになる。

戦後の別府温泉

昭和20年（1945）の敗戦によって平和は戻ってきたが、国土は荒廃し経済は停滞を余儀なくされている中、国土復興と国民経済の立て直しは急務の課題であった。別府の市街地は戦災にあわなかったが、昭和21年12月には米軍が進駐してきた。昭和22年（1947）８月に国際観光港設置期生会が結成され、これが別府観光の再建の始まりであった。同月には阪神別府間の航路が復活し、次第に再建は軌道に乗り始めた。昭和25年（1950）、「国際観光温泉文化都市建設法」の公布によって本格的に復興が動き始め、この年にはラクテンチが再開を果たしている。戦後の復活の中で、別府観光に関わる施設整備が急速に進んでいった。昭和26年２月には九州横断道路の観光港－堀田間が着工され、10月には国際観光港の起工式が行われた。また、東京－都城を結ぶ急行高千穂の運行が始まったが、これは東京直通の初めての列車であった。昭和28年（1957）には別府市に隣接する大分市高崎山ではニホンザルの餌付けに成功して自然動物公園が設けられた。そして、昭和32年（1957）には別府温泉観光産業大博覧会が開催され、同年５月には別府タワーが竣工した。進駐軍の接収から解除された鶴見園は鶴見園レ

ジャーランドとして再開したが、戦前の目玉であった歌劇団の復活はならなかった。大型ホテル、大浴場、大劇場が次々に建設され、広大な庭園は野外遊戯施設として整備された。この頃、別府市には年間600万人もの観光客が押し寄せていた。昭和33年（1958）には全国植樹祭の開催に合わせて国道210号線の別府・志高湖間（九州横断道路の一部）が改修工事が行われ、翌年には由布院・水分峠間の付け替え工事も開始された。そして昭和36年（1961）には飯田高原から阿蘇へとつながる道路建設も始まり、昭和39年（1964）10月４日、九州横断道路は別府・阿蘇間が開通した。昭和36年には現在の城島後楽園ゆうえんちが開発され、昭和37年（1962）には鶴見岳ロープウェイが開業した。昭和39年（1964）には高崎山の麓に大分生態水族館（現うみたまご）が開館している。

現代の別府温泉

高度経済成長によって国民生活は格段と向上し、自家用車が普及した。それまでの別府の地獄めぐりはガイド付き遊覧バスとセットで発展してきたが、今日では各地獄では大規模な駐車場を整備し、マイカーによる観光客が多くなっている。1980年代はテーマパークの時代であったが、それに先だって昭和51年（1976）に安心院町（現宇佐市）に九州自然動物公園アフリカンサファリが開園し、平成３年（1991）には日出町に遊園地のハーモニーランドが開園した。これらの施設は広大な面積が必要となり、まさにマイカー時代の観光地といえる。これら別府市周辺の観光施設は別府温泉と密接な関わりを持ちながら現在に至っている。また、1980年代はバブル経済の時代でもあった。昭和63年（1988）には「総合保養地整備法（リゾート法）」が制定され、全国でリゾート開発と銘打った大規模開発が始まった。大分県でも翌年に「別府くじゅうリゾート」が承認され、開発計画が持ち上がった。しかし、平成５年（1993）頃からバブル経済は破綻し、各地の大型開発計画は頓挫した。その影響は別府にも及び、老舗を含む旅館の廃業、企業の保養所の撤退が相次いだ。

昭和60年、「鉄輪・明礬・柴石温泉」が環境庁（現環境省）から国民温泉保養地の指定を受けた。平成17年には国土交通省の「まちづくり交付金」の認定を受けて、鉄輪地区始まって以来初の大規模な再整備を行いつつある。鉄輪温泉街の通りを石畳にしたり、サインをリニューアルするなど、温泉情緒を残しながら、新しい街づくりが行われつつある。この「鉄輪地区都市再整備事業」では「ふれあいと情緒ある温泉街の賑わいを再生し、うるおいに満ちた湯けむりたなびく交流型観光地の創造」を目的としている。平成17年度（2005）から５か年計画で総事業費９億6,000万円の事業が実施され、鉄輪蒸し湯温泉（リニューアル）、観光交流センター（地獄蒸し鉄輪工房）、街灯、市道美装、情報板、ポケットパーク等の整備などが行われている。

平成８年（1996）、観光産業研究会が「別府八湯カッテに独立宣言」を行い、それ以来、「別府八湯」という名称は広く知られるようになった。現在、別府では「別府八湯」と称して、古くから由来のある温泉地８か所をあわせてアピールしている。と同時に８か所の温泉地の特徴や個性を活かして活性化を図ろうとする動きが本格化し、竹瓦倶楽部や鉄輪愛酎会などの住民組織が結成され、ボランティアガイドによる街歩きツアーが各地で行われるようになった。それを受けて別府市は平成13年（2001）に「観光ガイド養成講座」を始め、その受講生の有志の中から「語り部の会」が誕生している。

平成13年には第１回「別府八湯温泉泊覧会（オンパク）」が開催され、別府温泉郷におけるまちづくり活動の中心となっている。別府八湯地域において温泉を核としたウェルネス産業を起こすことを目指している。平成15年（2003）の春、別府八湯アチチ探検隊によって地域通貨「湯路」が考案された。平成14年（2002）秋に別府八湯トラストが設立された。主として別府八湯の自然環境の保護および歴史的な温泉文化を有する建造物などの保存と利活用に関する各種活動を行い、別府八湯の町づくりに貢献することを目的としている。

平成16年９月にはNPO法人別府八湯トラストとなり、本格的な会員募集、基金の充実が始まった。また、啓蒙的活動として、別府周辺地域の自然環境の保全を目的としたエコツーリズムの活動「別府湾地球学校」が大分県のNPOパートナー事業として採択された。

旅館と湯治宿

明治から昭和初期までの別府の宿はいくつかに大別できる。１泊２食を基本とする一流旅館の「旅籠」、室料だけを払って寝具や食料を実費で購入する現在の貸間旅館に近い「木賃」、旅籠と木賃の中間形態で、１泊３食寝具つきで、その他必要なものを購入する「入浴賄」、諸家具つきの離れ座敷で、間代だけを払う「貸間」、それに西洋的な施設を取り入れたホテルである。

鉄輪温泉では、近世から営業していた旅館は３軒、明治20年（1887）から大正11年（1922）までに開業していたのは15軒で、蒸し湯を中心に営業していた。昭和になると、地元住民と外来者が開業した旅館は別形態であった。地元住民による旅館の多くは農業との兼業で、湯治宿は農家の一部を賃貸していたのである。また、観光地区の地獄地帯と長期滞在型の湯治地区は地域分化し始めていたと考えられる。昭和27年（1952）の各種観光パンフレットによれば、内湯を完備していることが旅館のアピールポイントとなっていたようで、従来の外湯（共同温泉）に通う湯治スタイルから、内湯利用のスタイルへと変化しつつある様子が窺える。また、眺望をアピールポイントとする旅館も増加しており、旅館の高層化が推測される。一方では学生生協指定とか学校指定との記載もあり、修学旅行を積極的に受け入れていた。さらに洋間や離れ家の改装も行い、新婚旅行客をターゲットにしていた。昭和33年（1958）の雑誌『湯けむり』の特集「改築されて行く鉄輪温泉」によれば、温水プールや屋根付き露天風呂、野天の蒸し風呂の改装や増築が行われ、入浴施設に工夫をこらしていたことがわかる。

高度成長期、昭和39年の九州横断道路の開通によって鉄輪温泉は大きく変貌を遂げる。横断道路沿いに進出した旅館には鉄輪地区以外から進出してきたものも多い。この頃の鉄輪温泉は、中規模旅館に分類される旅館が多かったが、大広間や温泉施設、売店や喫茶など大規模旅館に匹敵する施設を整備していた。この時期には鉄輪地区内の小規模旅館の中には、団体客や宴会客を新たに取り込もうとする動きがあり、その結果、貸間専門の自炊宿から食事付きの一般旅館へと経営形態を変えていった。

高度経済成長期以降には旅館数の減少が顕著となる。成長期以前の昭和29年（1954）67軒、成長期の昭和38年（1963）88軒、全盛期の昭和42年（1967）97軒へと増加の一途をたどるが、バブル崩壊後の平成８年（1996）71軒、平成20年（2008）48軒と減少し、全盛期と比較すると半減している。近年の健康志向の高まりとレトロブームを背景にした湯治ブームにのって、地獄蒸し料理など地域の特性を活かした堅調な旅館も存在する。また、鉄輪温泉には自炊宿が現在でも25軒営業を続けており、湯治場としての機能は保持されているといえよう。

明礬温泉の歴史は古いが、明治９年の『豊後国速見郡村誌』によれば、「浴場壱ヶ所、逆旅拾戸、良く客一ヶ年凡壱千人」と記載されている。その後、湯の花生産が盛んとなり、その名声が広まるにつれ、明礬温泉を目指す入浴客も増えていった。明治末には旅館12軒、大正10年（1921）には15軒と増加し、村有の鶴寿泉と地蔵泉を中心に展開していった。明礬温泉の全盛期は大正から昭和にかけてで、その頃は客馬車が通り、鉄輪温泉を凌ぐ賑わいであったという。明礬温泉は皮膚病に効能があるとされ、敗戦後は栄養失調が原因と見られる皮膚病患者が押し寄せ、どこの旅館も廊下まで湯治客が溢れていたという記録が残されている。昭和33年（1958）12月、明礬地区は大火に見舞われ、旅館４軒、食品店１軒、鶴寿泉が焼失した。このような災害もあり、高度経済成長期には別府・観海寺・鉄輪の諸温泉のような賑わいに至らなかった。しかし、国道500号線が整備され、アフリカンサファリへの通り道となり、山間の「癒し空間」として評価され、藁葺きの湯の花小屋の建ち並ぶ景観も人気を呼んでいる。現在９軒の旅館が営業しており、そのうち６軒は大正10年に既に開業していた老舗旅館である。

最近、鉄輪地区では湯治客を受け入れる貸間が減少し続けている。かつて鉄輪温泉には「鉄輪貸間組合」があり、昭和53年（1978）には46軒が加入していたが、平成16年（2004）には17軒となり、その後組合は解散してしまった。湯治客は農家の常連客と療養治療の客とに大別できる。今日別府市において湯治慣行が息づいているのは鉄輪温泉だけであろう。

鉄輪温泉では、交通アクセスの変化によって湯治形態も変貌してきている。広島と別府を結ぶ急行列車や航路

の廃止によって、広島からの湯治客は減少してしまった。また、湯治客の世代交代も次世代がいないため壊滅状態である。ある年代となれば行くことが当たり前だった家庭や地域社会（隣組）の環境が一変し、このような形の湯治は風前の灯火といえよう。しかし、鉄輪温泉は長期間の湯治を支える機能がまだ備わっているとの声が多い。自炊を尊重する宿、自炊客相手の商店、そして毎年顔を合わせる馴染みの「湯治仲間」、このような全国でもまれな環境ゆえに、１か月単位で毎年何回か来訪するという客もいる。

その一方では、新たなタイプの体験型湯治客の掘り起こしに努める宿もある。別府温泉郷の貸間旅館宿泊者の動向は一般観光客とは大きく異なっており、湯治宿が集積する鉄輪温泉は別府温泉郷の中でも独特の雰囲気にあることがわかる。

「蒸し湯」が建て替えられる直前の平成16年（2004）の湯治客の動向に関する調査結果をみると、自炊形式の貸間を併設している旅館では、「蒸し湯」を利用したという客は半数以下にすぎなかった。さらに、蒸し湯の存在を鉄輪に来て初めて知ったという宿泊客もおよそ半数に上っていた。一般旅館では蒸し湯の存在についてはほぼ半数の宿泊者が知っていたが、利用した割合は22％と急落してしまった。建て替え前の「蒸し湯」はその存在は知られていたものの、湯治客にとってはあまりなじみのないものであり、観光客にとってみれば鉄輪の名所であっても遠い存在であった。しかし、平成18年（2006）９月に新装となった「蒸し湯」では、オープンして３年目の2009年９月に有料利用者が10万人を突破し、年間利用者数は３万３千人と倍増し、鉄輪を訪れる宿泊客の大半がその存在を知っており、さらに「蒸し湯」が目的という観光客も多い。

（３）民俗と芸術文化

上総掘り

明治９年（1876）、別府の温泉は湧出泉31か所、浴場36か所、旅館数142軒であった。明治44年（1911）には、町営温泉数24か所、その泉源は自然湧出７か所、突湯17か所で、個人所有温泉数569か所・浴槽数714槽、その泉源は自然湧出10か所、突湯59か所となっていた。昭和24年（1949）4,001孔（枯渇孔と廃孔を含む）、昭和35年（1960）2,592孔、昭和45年（1970）3,758孔、昭和55年（1980）2,861孔、平成２年（1990）2,703孔、平成12年（2000）2,904孔である。そして、平成20年（2008）３月末では、未利用179孔を含め、2,516孔となっている。

明治期から昭和20年代まで、これらの温泉の泉源は千葉県から伝来した上総掘りで掘削され、それ以降は機械ボーリングによって行われるようになった。

上総掘りでは、まず最初に泉源となる掘削地にヤグラ（櫓）を組むことから始まる。櫓は頂上部にテンビン（天秤）を載せ、ヒゴクルマ（籤車）を設置する部分を付け足す。上総掘りでは、鉄棒の先に装着したノミ（鑿）を孔底に突き落として掘削する。その鑿と鉄棒を吊り下げるのがヒゴである。連結した竹ヒゴの先には鑿のついた鉄棒を装着した。別府で独自に開発された技術もあった。ひとつは孟宗竹を二本用いて反対方向に取り付けたテンビンである。テンビンはヒゴを引き上げる弾力を受け持つ装置で、本来の上総掘りは片方しかテンビンがなかった。両テンビンによってヒゴを引き上げる力が増加し、より重い掘鉄棒と鑿を装着することが可能になったのである。また、ヒゴの持ち手であるシュモクは本来棒状だったのに、鉄輪を用いた円形の丸シュモクに改良され、一度に３～４人の湯突き人夫が操作できるようになり、孔底に打ちつける鑿の打撃力も強くなった。上総掘りは、別府の地質に適応すると共に温泉の泉源掘りという特化した井戸掘り技術に進化したのであり、この技術なしでは日本一の湧出量を誇る別府の温泉はなかった。

湯の花

平成18年、「別府明礬温泉湯の花製造技術」は国重要無形民俗文化財に指定された。千葉県の「上総掘り技術」

と共に民俗技術分野での全国初の指定で、奇しくも別府温泉と関わりのある指定であった。江戸時代、明礬温泉ではその名の通り「豊後明礬」が製造されていた。明礬は止血剤、染色の際の媒染剤、皮革のなめし剤として重要な科学物質であった。別府地域での明礬製造の歴史は寛文年間（1661～73）に始まり、全国有数の産地となっていったが、幕末期には度重なる自然災害や安価な唐明礬の輸入増大などにより、次第に衰微の道をたどることになった。明治17年に明礬生産は中止寸前まで追い込まれたが、明礬の半製品を「湯の花」という名称で入浴剤として京阪神に売り出したところ、きわめて評判が良く、それ以来、別府の温泉土産として確固たる位置を占めるようになる。湯の花作りは藁葺き屋根の湯の花小屋で行われ、その湯の花小屋が建ち並ぶ様子は、明礬温泉の景観の最大の特徴となっている。湯の花小屋を造るには、まず「床つくり」から始まる。床下となる部分に石を組んで硫気溝を造って藁を上に敷き詰め、その上を土で覆う。次に藁葺きの小屋をその上に建てる。湯の花小屋ができると、床に青粘土を10～15㎝の厚さに敷き詰めてたたき固める。床下から硫気が噴き出していれば良いが、そうではない湯の花小屋の場合は、噴気を引き入れる。30日から70日経つと、青粘土の上に湯の花が結晶するので、鏝で掻き取って採取する。噴気（硫化ガス）に含まれる硫化水素と二硫化水素は酸素の供給量により過酸化硫黄となり、青粘土の硫気溝附近では冷却されて硫酸となる。それに対して青粘土の地表面附近は蒸発して乾燥するので、青粘土の細隙を通って毛細管現象で硫酸が上昇する。その途中で青粘土中の鉄やアルミニウムを溶出して、硫酸鉄・硫酸アルミニウムとなり、青粘土上に針（霜柱）状の赤・黄・白の結晶となる。これが湯の花（ハロトリカイトとアルノーゲンの混合物）である。

温泉利用

別府市は温泉の湧出量・泉源数共に我が国最大を誇っているが、市内どこでも温泉が湧出するわけではない。また、かつては豊富に自然湧出していた浜脇地区では現在ではほとんど皆無に近い。このような温泉に恵まれない地域では湧出量の豊富な泉源から給湯することによって対応している。温泉給湯事業が始まったのは、大正から昭和初期にかけてで、現在では市・市振興センター・民間の給湯会社・個人によって行われ、１日12,000kℓの温泉を一般家庭3,000戸、旅館保養所196軒、共同浴場90か所、病院27か所、学校・老人ホーム等19か所に給湯している。

別府は温泉観光都市とはいえ、温泉利用の主体は地域住民で、市有市営温泉18施設、市有区営温泉65施設、区有区営および組合営温泉19施設と公共浴場が多数整備されている。また、温泉の給湯によって、多くの公共浴場や個人宅で温泉入浴が可能になっているのも別府市の温泉の特徴といえる。温泉利用は入浴に限らず、多方面に及んでいる。まず第一に挙げられるのが、地獄蒸しである。また、鉄輪の貸間旅館などでは温泉暖房やオンドル式の洗濯物干場を設けているところもある。かつては温泉熱を利用した製茶工場もあった。温泉まんじゅう・おこし・せんべい・かるかんなど、噴気を用いて蒸したり、温泉熱を用いて加工した土産物もある。温泉成分を用いた薬剤もある。湯の花については前述したが、血の池地獄ではマグネシウムを多く含んだ鉱泥で製造した皮膚病用の軟膏が販売されている。七島藺で織った七島表は縦糸にイチビを用いたが、イチビを噴気で蒸していたのである。また、温泉を利用したり研究してきたユニークな施設がある。「大分県農林水産研究センター花き研究所（通称：花きセンター）」「九州大学病院先進医療センター（通称：温研）」「京都大学大学院理学研究科附属地球熱学研究施設（旧称：京都帝国大学地球物理学研究所）」である。

入浴習俗

貝原益軒は『豊国紀行』で亀川の「塩湯」、鉄輪の「乾浴（蒸湯）」などを紹介し、一部では内湯があったことを記している。また、江戸時代には温泉ごとの効能が知られており、堀田温泉の効用は皮膚病だったなどと「村明細帳（時期不明）」に記されている。また、浜脇温泉には「砂湯」があったという記録もある。

湯治慣行として一般的に「七日一廻り」といわれてきた。これは体内のさまざまな物質は７日間で巡り出るという考え方で、そのサイクルに合わせた入浴が適しているとされている。そのため、湯治客は一廻り、二廻り、三廻りと、短い人で１週間から長い人で１か月以上も滞在してした。入浴方法は地域によって違いはあるが、初日は１度入浴し、２日目は昼夜１度ずつ、３日目は昼１度夜２度、４日目は昼夜２度ずつと徐々に増やしてゆき、後半の５日目からは減らしていった。泉質や入浴方法の違いはあるが、入浴時間は５分から10分が良いとされた。亀川温泉の「すじ湯」は筋の痛みに効くと伝えられ、浜脇温泉の「寿温泉」は子宝の湯と呼ばれ、鉄輪温泉の「熱の湯」は身体の熱を除去することから名付けられたという。

昭和30年代まで、別府地域の温泉は湯治客が多数訪れていたが、とりわけ鉄輪温泉は湯治の中心地として賑わっていた。昭和初期、鉄輪温泉で湯治宿を営んでいたのは、大半が農家との兼業であった。鉄輪の湯治客は「蒸し湯」「渋の湯」「熱の湯」などの共同浴場に通って湯治をしていた。蒸し湯はリューマチや神経痛に効能があるとされ、蒸し湯前の薬師如来像前には癒された湯治客が奉納した松葉杖が山と積まれていたという。蒸し湯の構造は八角形で一度に16人を収容できた。室内には石菖が敷き詰められ、2006年に建て替えられるまでは男女混浴であった。かつては男は褌、女は腰巻き姿で入浴したという。現在は下着かＴシャツで入浴する。蒸し湯と共に別府地域の温泉を代表する入浴法に「砂湯」がある。これは海岸に湧き出る源泉を利用し、体全体に砂をかけて暖まる入浴法である。また、「滝湯（打たせ湯）」「泥湯」もある。

祭り

別府地域において温泉が人間の経済や生活に大きな影響を与えてきたが、同時に独特な文化を形作ってきたことを忘れることはできない。

別府市では数々のイベントが開催されている中で、「別府八湯温泉まつり」「鉄輪温泉の湯浴み祭り」「浜脇薬師祭り」などの温泉にちなんだイベントがある。いずれも温泉都市別府として観光宣伝に重点を置いたイベントである。

毎年９月21日から23日にかけて鉄輪温泉で「湯浴み祭り」が行われる。現在では、初日には蒸し湯を無料開放し、上人餅つき会と献湯祭が行われ、２日目には永福寺での法会の後、午前11時より湯浴み法会が催される。稚児行列を先頭に上人の木像を担いだ白丁姿の一行と、その後ろに善の綱を引く信者が続いて街を練り歩く。途中の渋の湯と蒸し湯で上人像を湯浴みさせて元湯で湯をかけ、住職の法要が繰り返される。最終日にはお宝鑑定会とガラクタ市が行われる。永福寺に伝えられた話では、明治時代に松寿寺が廃寺となるまで、一遍上人の坐像を沐浴させる法会が催されていたという。それをもとに昭和35年（1960）に復活したのが、現在の「鉄輪温泉湯浴み祭り」である。地元有志が観光宣伝のために復活したもので、現在では鉄輪共栄会が主催している。

毎年４月１日から５日にかけて、別府市最大のイベントである「別府八湯温泉まつり」が開催される。もとは朝見神社に合祀されていた温泉神社の春祭りであったが、昭和４年10月に創始された別府商工会議所は、現在のなかよし公園に温泉神社の神輿をお迎えして、豊年祭を始めたという。その契機となったのは、前年に別府と浜脇の埋め立て地で開催された中外産業博覧会であった。この豊年祭を昭和６年（1931）に全市あげての連合祭としたのが、温泉祭りの始まりである。昭和20年の敗戦前後は温泉まつりも一時衰微・中断していたが、昭和25年の「別府国際観光文化都市建設法」の施行をきっかけに、温泉まつりも復活し、昭和27年に発足した別府市観光協会が、別府市と別府商工会議所と共に温泉まつりを支えるようになる。現在は、別府駅前通り会場を中心に松原・浜脇・鉄輪・亀川・堀田地区の６か所で開催され、別府駅前通りでは別府八湯献湯祭・湯かけ神輿・温泉道名人表彰式・仮装温泉おどり大会などが催される。また、扇山火まつりも行われる。

毎年８月末の金曜日から日曜日にかけて浜脇温泉（湯トピア浜脇）とその周辺で「浜脇薬師祭り」が開催される。薬師如来の法要、風流見立細工、お化け屋敷、歌謡ショーなどが催され、最終日には花魁道中が繰り広げら

れる。

食文化

『鶴見七湯廼記』に温泉と食について、次のような絵と文章が記されている。「第一　照湯の湯」の項には「はた地獄といひて萬づの食ものを蒸て里人の天幸を得ものも、此ところより火気の大なるはなし」と記されている。「第三　伊麻井の湯」では「はた此地獄にて常に里人の食物を蒸こと也。あらはす所の図画を見て知るべし」とあり、蒸し物をしている図と噴気を使って調理をしている図が描かれている。また「鶴見産物の事」では「此照湯の地獄にてすべて蒸物をなすに、食物に礬硫の気少しも移らず、薪を費さず其便利なる事いふも更なり」と地獄蒸しの利点が書かれ、軽羹、椿餅、行成餅と蒸琉球芋などのレシピが載っている。さらに「きぬかつぎ（里芋の子芋）」「まんじゅう」「赤飯」「粽」「いびら」などを地獄で蒸していた。

明治18年発行の『豊後国速見郡村史』には「此戸外毎ニ地ヲ穿チ形チ竈ノ如キヲ作リ、茶ヲ沸シ、菜蔬ヲ蒸ニ宜シク、其温泉ノ脉絡諸処ニ通シ、熱湯ノ湧出スル事枚挙ニ遑アラス」と記され、現在と同様の地獄釜の使い方がされていたことがわかる。明治42年発行の『別府温泉誌』には「其の到る所蒸気を噴出するを以て毎戸の軒下に小孔を穿ち、其口頭に環藁を繞らし、釜甑を掛けて飯を炊ぎ、又蔬菜を烹るの用に供す（中略）土産　鰹塩から湯ノ花饅頭、温泉飴、白酒、芽生姜漬」と記され、かまどを築かずに噴気を直接利用している様子がうかがえる。さらに明治43年の『南豊温泉記』の「鉄輪」の章には「鉄輪名産には（中略）又た白玉饅頭「ヨーカン」地獄廼月等あり。皆煮火を用ひず、地下より湧出する、熱気にて蒸し製したるは、他に類なき、名物なりと、謂わざる可らず」と書かれ、饅頭や羊羹などの菓子類を噴気を用いて製造していたのである。

戦後になっても、噴気の利用は続く。中には昭和25年に鉄輪温泉製茶工場で温泉熱を利用して茶葉を乾燥していた例もある。しかし、この時期になると、長期滞在型の湯治客が激減し、旅館やホテルに泊まる短期滞在型の観光客が増加してきた。現在は温泉の噴気などを使う釜を「地獄釜」と呼び、源泉からコンクリート製壺状のかまどにパイプで噴気を引き、ざるに入れた野菜類をセットして蒸したり、鍋をかけて煮たり、釜をかけて飯を炊いている。地獄釜で蒸した料理を「地獄蒸し」といい、鉄輪地区を中心に日常的に、あるいは積極的に用いて観光の一翼を担っている。近年では地獄蒸し（料理）、蒸し寿司、温泉卵、地獄蒸しプリン（温泉プリンともいう）、まんじゅう、中華まんじゅうなどの地獄蒸しを利用した料理や菓子が別府観光の目玉となっている。また、最近では噴気を一定の温度まで下げた調理法も工夫されてきている。

美術

大正末期から昭和初期にかけて、都市文化が成熟していくなかで、日本では美術がさまざまな形で人々の生活に取り入れられ、芸術家たちは広告、デザインといった商業分野に携わるようになる。別府でも美術は観光と深く結びつき、泉都別府の新たな魅力を国内外に発信するようになる。昭和８年、イギリスの劇作家ジョージ・バーナード・ショウ（1856～1950）は「海から見る別府はまことに素晴らしい。自然が作り出した最高の芸術だ。上陸して美しい別府観を失いたくない」と船上記者会見で述べている。この頃の別府は世界周遊観光船の寄港地で、外国からの著名人が多く来別していた。このバーナード・ショウの物理的な視線に対して、はるか上空から別府を眺める人物がいた。絵師吉田初三郎（1884～1955）である。京都出身の初三郎は、大正から昭和初期にかけての観光の黎明期に、国内外の各都市、名所、観光地の正確な地形図と現地での綿密な踏査写生によって2,000点余りの名所図絵及び鳥瞰図を残した。吉田は大正13年に油屋熊八の依頼で別府を描いた鳥瞰図を制作している。これを原画として、さまざまな観光パンフレットや観光地図が製作された。また、「別府近郊高級乗合自動車遊線地獄めぐり」や「耶馬溪回遊高級乗合自動車」のポスターも手がけ、昭和３年の「中外産業博覧会」のポスターと会場案内図、昭和６年の「全国大掌大会」のポスターなどを制作し、泉都別府の産業と観光の宣伝

に大きな役割を果たした。

別府は温暖な気候と豊かな物産、そして恵まれた風光に恵まれ、さまざまなの画家たちが別府を訪れ、絵筆をとって風景を描いてきた。小出楢重（1887～1931）、中村研一（1895～1967）、梅原龍三郎（1888～1986）、伊谷賢蔵（1902～70）、権藤種男（1891～54）、東郷青児（1897～1978）などの画家が、別府を描いた作品を残している。

戦後、東郷青児が率いた二科会の第50回展が、東京・名古屋・大阪など９都市で開催されたが、この時、おにやまホテルが主催して別府でも公開されることになった。オープンしたばかりのおにやまホテルでは同展出品作と二科会会員の新作約30点を購入するなど、美術作品を用いて高級化を図ろうとしたのである。

平成21年４月11日から６月14日まで、別府現代芸術フェスティバル2009「混浴温泉世界」が催され、「アートゲート・クルーズ」「わくわく混浴アパートメント」などが行われた。温泉というテーマのもとに現代美術・演劇・音楽を含み込み、別府を内の人間である地域住民と外の人間である旅行者とのコミュニケーションによって形成される移入文化の街としてとらえたユニークで別府らしいイベントとなった。

文学

江戸時代の紀行文や地誌には別府の温泉のことが記されているが、湯けむりについてはほとんど触れられていない。ようやく近代になって「湯けむり」の言葉が取り上げられるようになる。明治期では徳田秋声の『浴泉記』『思い出の記』などの別府を舞台とした作品があるが、「湯けむり」の言葉は出てこない。大衆文学作家の田口掬汀は大正４年から５年にかけて、大阪朝日新聞に別府について触れた『ふたおもて』を連載したが、これも「湯けむり」の言葉は出てこない。大正９年、高浜虚子が別府に来て、「湯煙を吹き払ふ時風涼し」という湯けむりを主題にした俳句を詠んでいる。高浜虚子は昭和２年にも再び別府温泉を訪れ、海地獄を見て『二三片』に「濛々たる白煙が熱湯池から立ち上ってゐた。此カタり風吹けば彼方の岸になびき、彼方より風吹けば此方の岸になびく。その白煙の隙から後ろの山の翠色を仰ぐのも又風情がある」と記している。昭和６年に与謝野鉄幹晶子夫妻が別府温泉を訪れ、その時、与謝野晶子は「この世なる　豊の別府の海地獄　瑠璃の波より白雲ぞ湧く」と詠っている。昭和期になると、和歌や俳句、漢詩などさまざまな文学で「湯けむり」が取り上げられるようになる。和歌では尾上紫舟の「鶴見岳振りおろす雪に凝りたらむ　里の湯煙かたまりて立つ」があるし、俳句では中村汀女の「湯煙の中なる蝉に法師蝉」がある。また、中国の文学者で詩人の郭沫若は学術視察団長として訪日して別府に泊まった時に漢詩を詠んでいる。

現代文学では藤原新也の自伝小説『鉄輪』（平成12年刊）がある。門司港で旅館を営んでいた一家が破産し、無一文で鉄輪にたどりついた場面は次のように描写されている。“私たちは父が前もって見つけておいた貸間のある家の方に向かって歩きはじめる。鉄輪の町全体が見渡せる場所を通りかかったとき、私たちは立ち止まり町を眺めた。不思議な光景だった。月明かりに照らされて、町のいたるところから、もくもくと青白い湯煙りが上がっていた。「・・・・地獄みたいやね」と私が言う。「温泉は地獄じゃのうて・・・・」と父が言う。「そう、天国みたいに、ええところなんよ　と母は言葉を添えた。しばらくの沈黙があって、それから私たちはまた歩きはじめた。”

湯けむりに注目し始めたのは写生を重視した俳句であり、和歌であった。そして上総掘り、その後のボーリングによる多数の泉源掘削によって、沸騰泉からの噴気が別府各地で湧き上がるようになると、湯けむりは人々の意識に強く植えつけられるようになった。鉄輪の町起こしグループ「愛酎会」が“鉄輪俳句筒湯けむり散歩”の発句を呼びかけるようになったのも、湯けむり抜きでは鉄輪を語れない時代となっていることを示している。

また、鉄輪温泉の湯けむり景観を舞台とした映画もある。今村昌平監督作品の『復讐するは我にあり』（1979）をはじめに、山田洋二監督作品の『男はつらいよ　花も嵐も寅次郎』（1982）、坂本順治監督作品『顔』（2000）、

倉田径文監督作品『秋桜』(2003)、大森一樹監督作品『悲しき天使』(2005) などがある。

（4）景観構造

景観構造の調査は、鉄輪・明礬温泉地区において外来者や住民がどのような景観が好ましいと考えているかに注目し、保存対象となり得る景観構成要素を次のようにして調査した。まず、1）地区内部からの視点として鉄輪・明礬地区住民に要素についてのアンケート調査を実施した。2）地区外からの視点として外来者とのタウンウォッチングにて景観要素の抽出を行った。3）抽出された景観要素について改善すべき課題の整理や住民の意見抽出を行うワークショップを開催した。4）対象地区の景観の形成と維持管理に携わり、明治～大正期から旅館業を続けている地元住民と別府市の歴史研究と取材をしている新聞記者を対象にヒアリング調査を実施した。そして5）文献資料調査。6）土地利用実態調査。7）抽出要素の分布調査。8）研究者シャレット（研究者内ワークショップ）などを実施した。そして各調査によって、次のような調査結果が判明した。

鉄輪地区の住民アンケート調査では、景観に興味のある人たちが大きく評価した印象は「こぢんまりとした」「暖かい」「平静的な」「活気のない」という項目で、興味の度合いにかかわらず一致した評価は「特徴のある」「さびしい」といった項目であった。鉄輪地区にふさわしい要素として、塀や壁としては別府石が最もふさわしく、木製壁と竹の壁が続く。道路沿いにあるものとしては、地獄釜が一番で、溝からの湯けむりも高い評価を得ている。湯けむり関連以外では、石碑とお地蔵さま、そして木製ベンチや擬木の手すりなども評価は高かった。反対に最もふさわしくないものとして、ガスボンベ、室外機があがっている。また、いでゆ坂の街灯は評価が高く、反対に電柱・電線・蛍光灯型街灯は評価が低い。建物では共同温泉の評価が非常に高い反面、倉庫型建物や空き店舗は評価が低く、看板では木製のものや懸垂幕は良いが、窓に張られた看板はふさわしくないと一蹴されている。良いと感じる景観は、高台から鉄輪を見渡すことのできる九林プリンス横からの景観を選ぶ回答者が最も多く、続いて九州横断道路から山を望む風景が次いで、いでゆ坂や改修されたばかりのむし湯の風景も多かった。

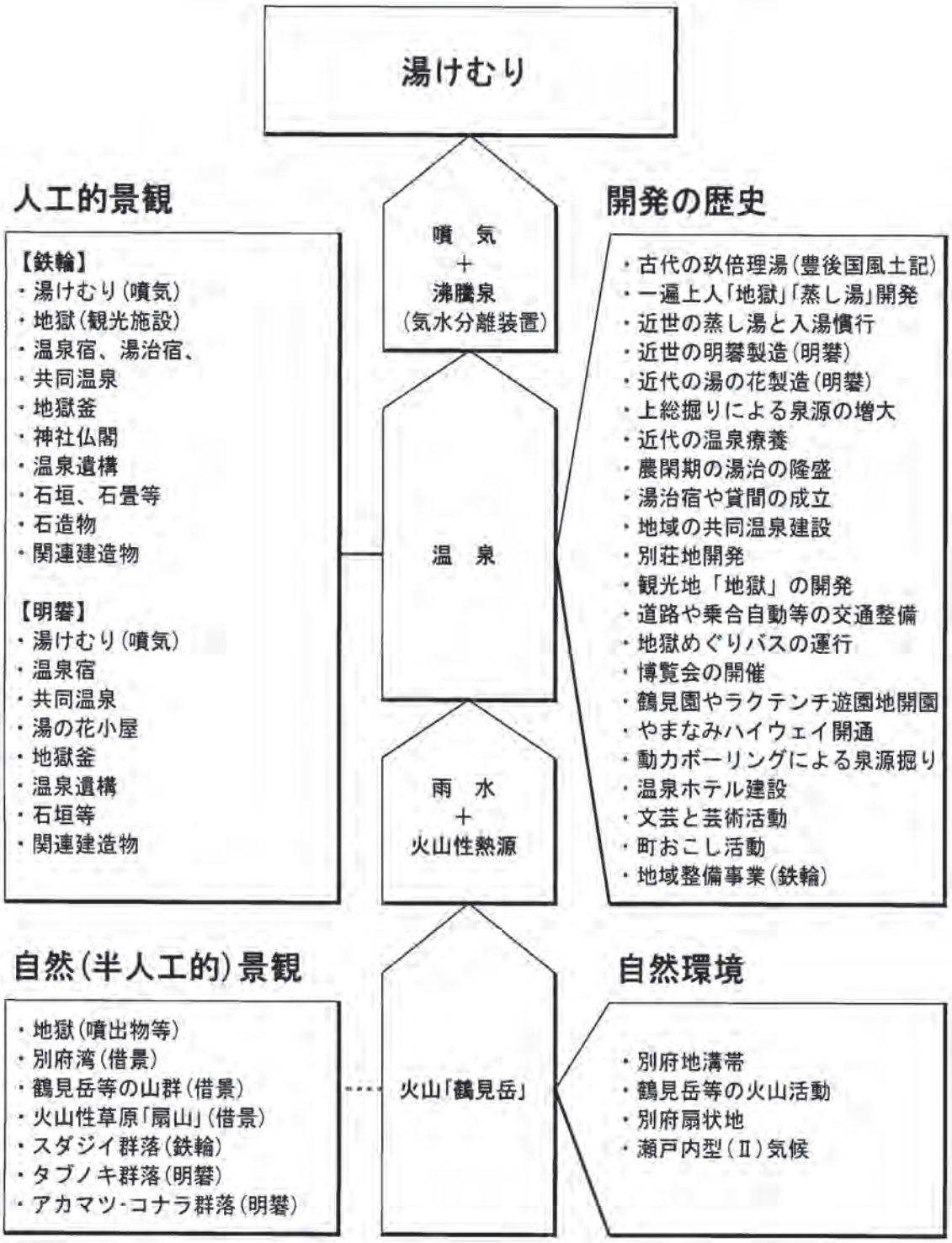
明礬地区の住民アンケート調査では、住民が景観や町並みに関する関心が高いことが特徴で、清掃活動を中心に壊れた公共物の修繕・街歩きガイド・整備のための寄付など、美観維持に配慮した活動を行っていることがわかる。景観のイメージは「印象的な」「特徴のある」というプラス思考の評価が多く、住民の総合的な明礬地区のイメージは「やや好ましくない」という回答が一番多かった。また、湯けむり・湯の花小屋など各景観要素の評価の中には悪い印象を受けると評価されたものはなく、すべての要素が好印象を得ていることが特徴といえる。

明礬地区のワークショップで一番議題に多くのぼったのは「湯の花小屋」であった。その次に共同温泉の「神井泉」「鶴寿泉」や「側溝・パイプからの湯けむり」「瀧蒸浴場施設記念碑」が明礬の歴史文化に関係する要素として選ばれている。また、それ以外にも、明礬地区の生活や生業と深く関わっている旅館や観光客向けの商店なども評価が高かった。

外来者の視点による鉄輪地区と明礬地区の景観認知は、タウンウォッチングによって好まれる景観と注意すべき景観を抽出した。また、住民アンケートや外来者によるタウンウォッチングにおいても挙げられなかった、その他の好まれる景観を研究者に挙げてもらい、研究者シャレットを実施した。これらの調査によって判明した「好まれる景観」の中から、「何を見て」「選定した理由」で回答された景観構成要素を取り出し、「近距離街並み型」「近距離自然的郊外型」「中遠距離山岳街並み型」「遠距離市街地展望型」の4つに類型化した。その中から、戦略的に保存すべき重要ゾーンを導き出した。現代の景観分析とともに、古写真を用いた景観構成要素の抽出も行った。このような調査を通して、重要文化的景観を構成する景観構成要素を抽出している。

（5）まとめ

別府地域は鶴見岳などの火山の山麓に位置し、そのため豊かな温泉資源を誇ってきた。しかし、江戸時代まではこの地域は数少ない温泉と「地獄」が点在する農村地帯に過ぎなかった。その中で別府村が「ながながしい在町」だったぐらいで、現在のような泉都別府のイメージとはほど遠いものであった。しかし、港や航路などの交通が整備された明治期になると、別府地域の温泉開発は急速に進み、湯治客相手の温泉街が各地に成立したのを手始めに、本格的な都市へと急激な変貌を遂げていった。上総掘りによる泉源数の増加や、宿泊施設と入浴施設が整備されたのである。大正期頃になると、遊覧に適した施設と交通手段が確保される中で、別府は日本有数の温泉観光都市として発展していった。地獄観光や湯の花製造など、温泉や湯けむり（噴気）を利用した観光産業が成立し、別府独特な温泉文化を形成してきたのである。その文化とは、湯治、別荘、観光などで別府を訪れる外来者と地元住民とのコラボレーションによって成立しており、美術や文学などの芸術から、温泉に関わる祭りや湯の花や竹細工などの土産物製造に至るまで、さまざまな分野に及んでいる。

鉄輪地区は現在でもなお変貌し続けている観光地であるが、現代においても湯治場としての機能を保っており、地獄とともに一種独特な情緒と景観を伝えている。また、明礬地区は藁葺き屋根の湯の花小屋が建ち並び、温泉場として他に例を見ない雰囲気を残している。また、遠く山や海を背景に湯けむりが林立するさまは、多くの人たちを驚かせ、別府温泉を代表するイメージとして心に刻みこんでいることは間違いないと思われる。

別府の湯けむり景観チャート